

議 事 録

| | |
|-------|--|
| 会議の名称 | 茨木市人権尊重のまちづくり審議会 第5回いのち・愛・ゆめセンターあり方検討部会 |
| 開催日時 | 平成28年4月13日（水） 午後2時30分～午後4時 |
| 開催場所 | 茨木市役所南館8階 中会議室 |
| 部会長 | 熊本 理抄 |
| 出席者 | 熊本 理抄 岩本 賢三 長田 佳久 柴原 浩嗣 三木 昭 <p style="text-align: right;">(5人)</p> |
| 欠席者 | なし |
| 主な議題 | (1) いのち・愛・ゆめセンターのあり方について (2) その他 |
| 配布資料 | 添付のとおり |

(順不同、敬称略)

| 発言者 | 内 容 |
|------|--|
| 事務局 | <p>開会</p> <p>ただ今から、第5回いのち・愛・ゆめセンターあり方検討部会を開催する。 本日は、委員5人全員が出席であるため、会議は成立している。議事の進行については、審議会規則第5条第1項を準用して、部会長にお願いする。</p> |
| 部会長 | <p>議題1 いのち・愛・ゆめセンターあり方について</p> <p>それでは本日の審議に入る。傍聴者はあるか。</p> |
| 事務局 | <p>傍聴者があるのでこれより入場していただく。</p> <p>【傍聴者入場】（1人）</p> |
| 部会長 | <p>それではただいまから議事に入る。本日は、子ども・若者の支援についてお話をお聞きするため、「子どもの貧困対策について」と題して特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば理事長の村井琢哉さんよりお話をお聞きする。</p> |
| 村井講師 | <p>【村井さん 講演の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童虐待のニュース、保育所が作れないニュースなど、子どもをめぐる問題は多く報道されている。難しい問題はいくつもあるが、ひとつひとつ原点を確かめながらトライアンドエラーで進めてゆけると良いのではないかと。 ・子どものころから山科醍醐こどものひろばの中で育ち、スタッフになっていった。もとは親と子の劇場という団体が母体になっている。地元でつながって育ちあってきた。代表としてやっているが、仕事でもなんでもなく趣味である。本業は別にあり、こういう活動を生活の隣に置きながらやっている。貧困に取り組みたいというより、この町で子どもとともに育ちあうためにはどういう振る舞いをすればよいかということを考えてきた流れでいま代表になっている。 ・薬物があるということが問題と言うより、それに対して備えをどうするかということがないままにバッシングされる。周囲の家族や親せきまでがセットでたたかれるしんどさを生み出している。弱いものが弱いものをたたく構図。貧困についても低所得で頑張ることができている人と低所得で頑張れない人のたたき合いという構図が生まれている。 ・虐待の背景には貧困や経済問題。 ・いじめの件数は横ばいだが、いじめに触れる経験をしたことのある子どもが87%。多くの子どもが加害者としてもいじめに加担している。いじめを経験し |

| 発言者 | 内 容 |
|-----|---|
| | <p>ながら学級での生活をしているのが日常になっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若い世代の死因の1位が自殺になっている。若くして死んでもよいと思える子どもがそれだけいるということ。 ・一人親世帯の貧困率が54.6%。OECDの33か国中最下位。子どもにかかる公的なお金が非常に少ない。 ・NPO法人予算の中で貧困対策に取り組んでいるのは3分の1くらい。それ以外は楽しいことをやっている。もともとはボランティアの組織で、子どもの地域における文化環境づくりに取り組んできた。 ・山科は京都盆地の東隣にもう一つ盆地がある配置。京都内とは認識されていない。洛中には公営団地がない。山科醍醐地域にはたくさんある。団地の少ない北の方が所得も高い層が住んでおり、南に行くほど、しんどい層が多く住んでいる。 ・京都ではコミュニティセンターなどをつくって箱モノの支援はやってきたが、それだけでは助からない層が残っている。土地や歴史、中央の人と虐げられてきた人の歴史を理解しなければならないし、それを踏まえた提案が必要。 ・もとは親子劇場、野外活動や演劇鑑賞、子ども会活動などをやってきて、それはこの36年続いている。健全育成事業。その中で、日常がままならない子どもたちが存在している。課題を抱えている子どもが他のまちより多いことから要援護児童支援事業や地域連携・社会啓発事業にも取り組んでいる。 ・外から「治安が悪い」と指摘されただけでは「そんなことはない」と返して終わり。町を見直すことが必要。 ・子育ての活動から、地域の活性化のイベント、体験活動など。子どもが大きくなるとボランティアとして関わってもらえるようになるまで。 ・体験活動に取り組むなかから、集団になじめない子ども、地域の子育てや教育に関わる中で見えてくる課題のある子ども、経済的な背景のある子どもなどのケアに取り組みながら活動を増やしてきた。結果的にたどり着いたのが「底なし沼」。貧困対策にたどり着いた。 ・貧困対策からよりプラスの活動へとつなげていけるよう取り組んでいる。貧困の子どもがいるから取り組んでいるのではなく、困っている子どもの背景に貧困があるから取り組んでいる。民間として貧しさを解消するのは難しい。収入か手当かを増やさなければならないが、母子世帯の平均年収が186万円。働いても一般世帯に届かない。逆に体を壊して生活保護に落ちていく例もある。 ・子どもが困っているのは今。子どもの成長やライフステージにおける壁は1年、2年ですぐにやってくる。お金の貧しさだけを時間をかけてやっても間に合わない。民間としては貧しくても困らないためのアクションをいま作ろうとしている。 ・貧困状態にある子どもの数は320万人。食堂などの支援もあってもよいが、対処療法を続けるだけでは解決にならない。 |

| 発言者 | 内 容 |
|-----|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・大阪府は各種の統計で見ても子どもの貧困率が高い。 ・日本の場合はお金のあるなしが豊かさに直結する。「宿題をするのに十分な広さと照明がある静かな場所」は特に十分ではない。また、そのことが学力などにも直結する。 ・3食食べているけれどカップめん、家はあるが勉強する環境がない。衣食住がないわけではなくても不十分。生活の様々な部分が少しずつ欠けていく中で貧困の連鎖が連鎖していく。 ・貧困世帯は20歳で1サイクル、大卒世代は30歳で1サイクル。貧困世代においては祖父母世代が支援できない。 ・貧しいことが不幸せになるとは限らないが、困りごととは貧しさから派生しやすい。 ・貧しい中でもやってこれた若者は、何らかのタイミングで先生や支援者に会えたことについて、多くが「ラッキーだった」と言う。 ・制度を当事者が使えない。窓口で書類が書けなかったり窓口担当者とトラブルになることもあって断絶してしまう。誰かが制度を届けるための人を育ててはならない。 ・子どもの貧困対策事業の柱は、安全・安心の確保や子ども自身の力をつけること。勉強ができる子どもには学習支援よりお金がかからなくても進学できる方法を一緒に考える方がよい。勉強や食事といった手段より、何のためにそれをするのかということが大事。 ・貧困世帯はインターネットを使えないことが、求人の差や進路の差につながる。日本ではその部分も剥奪率が高い。ネットが苦手でも誰かに見せてもらえるなら困らない。 ・「当たり前」が欠けているだけだから、専門家が入って特別な支援をしているわけではない。歯を磨く、頭を洗うといった一つ一つの場面で、親が手をかけられず少しずつ欠けていく。普通の過程で普通にやっていることを一緒にやっていく。「当たり前」を埋めていく。 ・子どものころから小さなごまかしや見栄を張ってカモフラージュすることを続けなければならなくなる子どもも多い。当たり前が少し欠けているだけなので、場面場面だけ見てもわからない。 ・マンションの一室や一戸建てで夜の食事や入浴、生活全般のサポートや宿題のサポートが必要。 ・子どもの生活範囲が限られるため、そこへのアクセスが問題になる。 ・学校運営協議会にNPOとして関わっており、毎年課題のある子どもを紹介されている。 ・地域でやっていることは対処だけ。対処が足りていないしその担い手も足りない。まずはその数を増やすことが大事。一方で、支援を必要とする人がいるということを知らせてくれる人もいない。呼んであげる人、迎えに行く人が必要。 |

| 発言者 | 内 容 |
|------|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・対象を限定するのではなく、いろんな人が集えるフリースペースや、参加者と提供者がイコールになるようなまちづくりをやろうとしている。児童館で高齢者が集っていることもある。そういう場をつくる中で限られたマンパワーでやって行ける、より楽しい場になることが期待できる。「子ども食堂」と言ってしまうと、高齢者が集まれない。フリースペースで「夜の食事会」をひらくという形を取る。いろんな人が関係があるという場をつくるのが大事。専門家と地元の思いを重ねて、小さくても多機能で来る人のニーズに合わせた支援。学区ごとにあれば、近場にはいきたくない人が越境できる。 ・社協等とのネットワーク。 ・こういう現状があるのだと声を上げていくことが大事。 ・最近ではお寺おやつクラブというものもある。お供え物をおすそ分けするスタイルで食事の寄付もある。 ・対処療法だけではなく、社会を変えることで「傷がつかない社会へ」。 ・相手を変えるだけではなく、自分を変える。自分たちの働きかけで「変えた」などはおこがましいことであり、みんなが少しずつ変わっていくことが必要。 ・共働きで成立している貧困家庭は、親の介護による働き手の減少や子どもの進学（大学に進学するタイミングで収入がなくなる）などで子どもの貧困は再燃する。収入はあってもお金に困ることが出てくる。貧しくても困らないようにしていくには、関係という資産（プラス）を貯蓄していくことが必要。 ・施設出身の子どもがホームレスになることを止めるためには、学力や仕事より生活力が問題。人との関係の中で生活力をつけることが必要。 |
| 部会長 | それでは何か質問があればお願いしたい。 |
| 委員 | 親にはどうアプローチしているのか。親が子どもに関わらないから子どもが困っているという面があると思うが、親へのアプローチをどうしているのか。 |
| 村井講師 | 行政的には親にアプローチするのが当然になると思う。貧困家庭は役所との間でトラブルを抱えていたり、専門家の観察や指導の文化があって、親もあまり好いていない。親に我々がアプローチしようとしても、同じ人種が来たと思われてしまう。役所の場合はお金というつながりがあるので、いやでもつながりを続けられるが、われわれは親に嫌われると関係が切れてしまうので、まずは子どもとの関係をつくろうとしている。子どもとの関係ができて初めて、親が我々を信用し、踏み込むことができると思う。 |
| 委員 | ここまでするまで何年かかったのか。 |
| 村井講師 | 地域で36年やってきたが、学校との連携で言えば、1年かかって初めて1回目 |

| 発言者 | 内 容 |
|------|--|
| 委員 | <p>の会議ができるようになった。子どもの変化が見えると学校は早い。一緒に取り組んでいる学校の特徴は学校だけでは支援しきれない児童や家庭が地域で一番多く、学校だけでは支援できないと、学校もなりふり構わず本気になっている学校が多い。体裁を考える学校は難しいが、そこで不登校になっている子どもがうちの支援事業に来ていることもある。学校との連携では教育委員会がモデルとしてアピールできるという意味もあって、協力してくれることが多い。校長会などでもアピールしてくれる場合もある。</p> <p>福祉事務所の人との連携で、異動先からも紹介してくれる場合などもある。</p> <p>地域との関係では説明会を何度も重ねている。どの会場に話を通すかということも何度も手順を踏むことで、地域との関係づくりを行っている。</p> <p>1つのプロジェクトを行うためには、手順を踏んで半年、説明に半年で、1年後にはやれるようなサイクルで7年目になっている。</p> <p>子どものことを必死に考えるのは困難校、昔で言えば同和推進校。これが一般校ではなかなかできない。そこで話がついても、地域で広がるということが同和地区ではできてもそれ以外に広げるのが難しいということを思う。ボランティアということだが、現状はいろんな人がいると思う。学生も必要だし、民生委員もなかなか手がない中で、いろいろ勉強させてもらえればと思った。</p> |
| 村井講師 | <p>同和教育や困難校を経験した先生は、我々がやっていることは昔やっていたことだなということが多く思う。そういう人が管理職になって、公務としては言えなくなってきたことや、それを継ぐ世代の教員数が少なくなっていて、それより若い世代は子どもを見るだけで精いっぱいノウハウが途絶えているということがああると思う。やってきた先生が校長になっている場合は解決法を知っている。そんな時に、一緒にやってくれるのか、という形で困難校と連携・協力する門戸を開いてくれる人がいる。</p> |
| 部会長 | <p>行政は申請主義、書類主義で役所へのアレルギーがある中で、橋渡しや人育てやネットワーク、また、150人が集まって話をするといった自治の取り組みもNPOの強みを発揮されていると感じた。</p> <p>国では法律ができていますが、一方での地方自治との連携や行政がNPOを応援する仕組みにこの数年で変化はあるか。</p> |
| 村井講師 | <p>生活困窮者の支援事業についても、やらなければならなくなったという面はあると思う。今までは生活保護だけを補足していればよかったのが、それだけではない生活困窮者に対処しなければならなくなった。また、一人親世帯や少子化対策で子育て支援の枠で見えてきたものは大きいと思う。子ども・子育て支援法においても、現実的にはメニューとしてはあっても、平日の居場所に親として来れ</p> |

| 発言者 | 内 容 |
|------|--|
| 委員 | <p>ることが前提になっているサービスが現状である。30歳で1サイクルの層の子育て支援であって、20年の1サイクルの母親の居場所になっていない。入っていく母親の姿を見て、自分の居場所ではないとためらう母親はいっぱいいる。学習支援についても、6～7年やってきた中で、当時の中学生がもう親になっていたりする。かつて関わっていた大学生が様子を聞いてみると、頼る人がいない、実はこんなことで困っていて・・・という話が聞かれることがあり、若い母親が集まれる場所をつくらうという話も出ている。今あるものは、支援が必要な人が行きづらい子育て支援になっている。</p> <p>支援のメニューの数だけ揃えても無駄が多い。機能を整理していく必要がある。</p> <p>放課後子ども教室などがあるが、そこに来る子は大丈夫で、来ない子が心配である。地域でボランティアがやっているのは学童保育や放課後子ども教室であり、体験活動はできるが、それは来てくれる子どもが対象。その子は心配しなくてもいい。来ない子が問題。いいフォローの方法はあるか。</p> |
| 村井講師 | <p>いまはアウトリーチ型の事業が増えており、子どもの取り合いになっている面もある。サービス同士がぶつかることもよくある。誰を応援できているのかというすり合わせができていない。活動はたくさんあっても漏れている子どもがはかれていない。何人来たからよかったという話しかしていない。来ていない子どもは不登校やいじめに遭っている子どもだったりする。学校に行けていない子どもが地域の他の団体に行けていればよいが、そこにも行けていない、家から出られていない子どもが見えてくると、訪問者が何人必要で、予算がどれくらい必要かということも見えてくる。そういう整理をすべき時期だと思う。拠点型はかなりできてきたので、訪問型の活動作りがこれから必要ではないか。</p> <p>ただ、家に入るとなると、子どもと合うかどうか、親と合うかどうか、親との人間関係のリスクなど、研修もかなり気を使わなければならない。我々も訪問型もやってきたが、子どもや家族と合う学生が出てくるまでは派遣しない。ただ、適切に合う人が派遣できると、劇的に変わることはある。</p> |
| 委員 | <p>合宿で集団の生活を一緒にやるというのがいいと思った。ボーイスカウトなどでもやっていることだと思う。生活を一緒にやる。そういう集団的な活動は効果があっていいと思うが、合宿はどのくらいの頻度でやっているのか。</p> |
| 村井講師 | <p>1泊2日を月1～2回、毎月のようにやっている。今来ている子どもは活動日が金曜なので、金曜から土曜という流れになりがちだが、合宿所形式でやっていることもある。その中で、家の中で平日学校に行くためのリズムをつくることを分かち合っている。小学校の生活習慣アンケートで3食食べていると安心して言えるような経験を積んでいる。1回の合宿で身につけるといよりは徐々に変わ</p> |

| 発言者 | 内 容 |
|------|--|
| 委員 | <p>っていくための環境整備になっている。</p> <p>宿泊支援について、いくつかのグループに助成金を出して一緒にやるということをやっていたが、その中で西淀川で山科醍醐の取り組みに倣って取り組んでいる事例があった。子ども食堂が広がっているが、児童健全育成でいろんな子どもが集まってくるところと、支援が必要な子どもを対象とする部分とで、支援が必要な子どもをどう健全育成の事業につなげているのか。また、全体の中で困難な子どもがどう位置づいているか、子ども同士の関係はどうなっているか。</p> |
| 村井講師 | <p>10年前に始めたころは、全戸配布のフリーペーパーを見て問い合わせしてきた方もいたが、今は受け入れられる人数が紹介だけでキャパを満たしてしまう。それだけいる。また、福祉事務所のケースワーカーがチラシを持って行ってくれることもある。とにかく気になる子がいるから話を聞いてほしいという形で話をされることもあるし、京都市の児童センターからネグレクト的な子どもを相談されることもある。また、地域に会員や元会員がいて、民生委員をしている場合もあるので、そういう声をかけてくれるアンテナを張っている人がいるし、議員からも話がある場合がある。また、学校の先生からの相談は、関わっていない学校から連絡があることもよくあるし年末などは多い。そういう形で、定員は一瞬で埋まってしまう。</p> <p>学習支援に来ている子どもに向けては、入学先で使えるような制度の紹介は活動の場に福祉事務所の人がきて説明をしてくれている。親に説明しても伝わらないかもしれないので、本人に説明するといったことは福祉事務所もやってくれている。困難な子どもに触れている人とつながっていくのが大事。</p> |
| 部会長 | <p>週に1回茨木にいらっしゃっているということなので、またよろしくお願ひしたい。</p> |
| 事務局 | <p>行政としてお聞きしたいが、この委員会は隣保館のあり方の検討を行っているが、地域の隣保館や行政施設とのかかわりや、そこに求めることについてお聞かせいただきたい。</p> |
| 村井講師 | <p>京都市内は児童館が全小学校区にあるが小規模で予算があまりない。市営・府営住宅が多い中でコミュニティセンターを市民活動センターに置き換えた。今まではハード面を要求するコミュニティセンターから、地域の市民活動の入り口に変わろうとしている。一つの市民活動センターは市営住宅を対象に子ども向けの事業をやりたいとか、昔のお祭りをやっていたものを復活させたいといった事業を一緒にやろうとしている。またコミュニティセンターを会場とした学習支援などもある。自分たちでどういう自治をつくっていくのかというストーリーに替え</p> |

| 発言者 | 内 容 |
|-----|--|
| 部会長 | <p>て行こうという流れが出ているかと思う。そういう活動から相談を受けて支援をしているが、センターの調理室もしっかりしていて、月に1回調理実習もできる。理科の実験教室といえ夏休みの宿題もできる。子どもが日常困っていることを解消し、楽しいプログラムをやれる場として、できつつあるのではないかと。市民活動センターはNPOなどの団体の活動を支えるスタンスだったが、むしろ地域の課題がその周りにあふれているので、その課題についてちゃんと考える市民活動センターにならなければならないという方向で組み替えている流れではないかと思う。みんなで町を良くしていくセンターになっていくことが大事だと思う。あるセンター長は、職業も紹介できるような、自分たちがどうやったら稼げるかというような、応援する立場の人がチャレンジするさまが見えるようなセンターであれば、特に子どもたちにとっては良いと思う。</p> <p>今日は長時間にわたりありがとうございました。ここで少し休憩としたい。</p> <p>【5分休憩】</p> |
| 部会長 | <p>旧青少年センター、愛センター分館のあり方等も考える上で、村井さんには参考になるお話をいただいた。愛センターのあり方についてご意見あればお願いしたい。</p> |
| 委員 | <p>平成28年6月をもってとりまとめるという日程であったが、慎重に深く、広く進める必要があると考えれば、検討部会の期間の延長が必要ではないかと考え、提案させていただきたい。年度いっぱい検討してでも中身のあるものにしていく必要があるのではないかと。</p> <p>その理由を申し上げたい。箕面や鳥取、山科の事例を見る中で、また、茨木市の3センターの現状や経過を見てくる中で、茨木市と参考事例の違いが明確になってきており、茨木市としてどうするかを検討する必要がある。また、貧困問題に関しては、非常に幅広い課題を地域は抱えている。それらは特定の地域に限らず、程度の差こそあれ広く市全市に広がっており、どの地域でも必須・喫緊の課題・問題である。</p> <p>愛センターについては、各センターの問題・課題・反省などを時系列に整理して今後どう生かすかを考えていく時期に来ていると思う。これまで蓄積されたノウハウや景観についても、地域社会に活用できるよう、また各センターの活性化が実現されるよう、つなげるための検討が必要だと考える。</p> <p>そのためにも、今後の経営や運営についても、それぞれの手法のメリットやデメリット、特徴などを明確にしたうえで、課題克服に適した手段・手法は何かということを考えたい。また、茨木市に適したあり方について、人・場所・モノ・仕組みなど、市民活動センターや自治といった問題も絡めながら、今回の検討部</p> |

| 発言者 | 内 容 |
|-----|--|
| 部会長 | <p>会の中で考えていき、学んだことを委員だけに留めるのではなく、まとめていく中で市役所や議会にもご理解いただいて、市全体に展開できる内容にするためには、6月までの議論ではなく、検討期間の延長を課題提起申し上げたい。</p> <p>6月までというスケジュールの延長のご意見をいただき、私も賛成の気持である。というのは、茨木市の状況がまだよくわからないところがある。鳥取の生活困窮者の取り組みは聞いたが、それが茨木ではどうなっているか、子どもの支援はどうか、NPOについてはどのように活動があるのか。運営手法についても検討する材料があれば、議論がもっとできるのではないかと思う。また、旧青少年センターの役割についても、今日のお話を聞いてもう少し知っておきたいということを感じた。私としてもスケジュールの延長についてお認めいただければと思うがいかがか。</p> |
| 事務局 | <p>現状は6月までをお願いしていたものだが、この4月10日の市長選挙で市長が交代されることが決まっている。そういうこともあり、延長については、行政の継続性はあるものの、新市長の元での再調整も必要になることから、行政としては延長は可能であると考えている。今後予算の審議等もあるため、それも含めて検討させていただければと思う。</p> |
| 部会長 | <p>審議会本体との関係はどうなるか。</p> |
| 事務局 | <p>延長となれば審議会へ報告する。今後、新市長ともその点も含め調整していくことになるため、その中で意思決定をしたいと考える。</p> |
| 部会長 | <p>委員の皆様から、もう少しこんな議論がしたい、こんな話を聞きたいといったご意見があれば、また事務局や私にお伝えいただければと思う。スケジュールは再検討するということと、審議会への報告をお願いしたい。</p> |
| 委員 | <p>スケジュールについて、やればやるほど検討したい内容は増えていくと思うが、現場が動いていくということもあるため、6月を9月にするのか、いつにするのか、ゴールを明確にする必要があると思う。来年度のスタートに間に合わせるかどうかということもある。</p> |
| 事務局 | <p>指定管理を来年度からスタートするとなれば、9月議会に上程する必要があるため、6月中には方向性を出す必要があった。しかし、現状をこれまでお聞きいただいた中で、これからまとめるということになると、難しいかもしれないということは事務局でも感じており、延長の方向で進められるよう検討したい。</p> |

| 発言者 | 内 容 |
|-----|---|
| 委員 | <p>指定管理者導入が前提ではないと最近思い始めている。補助金を有効活用するという方向で、進めて行くのも一つだと思う。本当に茨木に適したやり方は何かということ、みんなで考えたいと思う。そのため、来年度4月に新制度導入という前提であるのは少し違うと思う。</p> |
| 事務局 | <p>最終的には答申をいただいて、それを尊重することは間違いない。</p> |
| 委員 | <p>9月ということも考えたが、9月までに本当にやれるかということもあったので、年内、年度内という期限の元に、もう少し早めにやれればと思う。</p> |
| 事務局 | <p>あまり伸ばすことを考えると、結果がいつになるかわからないので、方向性としても期限を検討部会の中でご検討いただけるならそれも含めて事務局で考えたい。</p> |
| 委員 | <p>この検討部会で何を検討すべきで、それにはどれだけの期間が必要かということになると思う。</p> |
| 委員 | <p>検討の課題があってスケジュールになるので、何を検討すべきかを明確にする必要がある。茨木市で今の愛センターになってきてこの役割をどうするか、また茨木市全体としていろんな課題がある中で、愛センターの役割は何かというところ。センターは人権の観点で取り組んでいくという役割があると思うので、市全体の中での役割を検討する時間が必要だと思う。そうしたことからスケジュールをご検討いただければ。</p> |
| 委員 | <p>直営か指定管理については、細かい部分は任せる必要があり、当部会では方向性を考えるべきだと思う。愛センターをすべての地域に広げることは無理だと思う。各小学校区には公民館があるが、教頭が公民館主事を担うという状況が続いてきた。しかし、社会教育の拠点をどうするかという観点から、まず、教頭主事を廃止した。次に、学校併設公民館を地区公民館やコミュニティセンターへ移行し、地区公民館を廃止し、小学校区公民館として位置付けた。そして、コミセン化として公民館の施設管理を地域へ委ねようとしている。それで全小学校区に施設ができています。</p> <p>しかし、コミセンと公民館の扱いが難しい。愛センターは独立している。コミセンでも公民館でもない。これをほかの学校区に、人権課題はいろいろあるにしても、同じものではできっこない。そう考えると、愛センターにはノウハウがあるので、沢良宜と総持寺だけかもしれないが、NPOが一端を担っているの、それをほかの小学校区に持ってきてても不可能だし、現状のあり方はこれでいいとは思わない。私自身はこれからの課題は、福祉の問題が一番大きいと思う。これはCSWと</p> |

| 発言者 | 内 容 |
|-----|---|
| 委員 | <p>の連携なども必要になる。それを市全体に持っていくのは不可能だと思う。</p> <p>したがって、この3つを福祉人権センターの拠点にしていく必要があるのではないかと思う。なので、愛センターは従来通りの形で、事業等の内容を変えていかないといけないところがたくさんある。</p> <p>しかし、直営か指定管理かは検討に非常に時間がかかると思うので、9月をめどに考えて行けばいいのではないか。予算の問題があるので9月だというだけで、ズルズルいっても決まらないと思う。</p> <p>経過や現状の課題は検討部会として明文化する必要があると思う。その上で今後どうするかということを検討しなければならない。ただ、地域を預かる者から言えば、学童保育や放課後教室に行けない子どもがたくさんおり、地域でやんちゃしている。これをどうするかということ、居場所として玉島公民館に来たいということもあって、地域で調整するという課題も出ているので、そういったことも踏まえて、3拠点でやってきたことを全て広げるのではなく、具体的に広げる中で蓄積したノウハウをどう広げるかということ市全体として考えたいと思っている。</p> <p>どうするかということを実際には玉島の者が沢良宜のセンターに相談に行くというのも難しいところがあるので、どうすればいいかということ考えたい。</p> |
| 委員 | <p>時期は伸ばしてもいいが、いくら伸ばしても年度内だと考える。</p> <p>審議会本体への報告も必要だし、部会長に調整をお願いしたい。要は、議論の諮問者が市長であり、市長が変わってしまうことになるので、検討部会の存在からボタンをかけなおさなければならないのではと思うので、事務局にご確認いただければと思う。</p> |
| 事務局 | <p>行政としての継続性として、諮問を取り消すことはない。</p> |
| 委員 | <p>ただ、市長が変わるので検討を延長して、きちんとやるということを確認してもらえばいいと思う。</p> |
| 委員 | <p>新市長の政策の方向が、我々の検討と一致するかどうかは、別問題だと思う。歴代市長は行政職出身だったが、新市長はそうではないため、きちんと事務局にはご確認いただきたい。</p> |
| 事務局 | <p>行政としては、市長名で行った諮問は「愛センターのあり方について」であることと、9月議会の議事の中で答弁していることでもあるため、行政的な手続きは踏んできており、検討部会で検討いただくことについては、行政の継続性から間違いのないところである。</p> |

| 発言者 | 内 容 |
|-----|--|
| 部会長 | <p>それでは、スケジュールについては事務局と調整して次回までに提示したい。事務局からその他の案件として何かないか。</p> <p>議題2 その他</p> |
| 事務局 | <p>スケジュールをもう一度調整してその上でご案内したいと思う。</p> |
| 部会長 | <p>それでは本日もありがとうございました。これで部会を終了します。</p> <p>閉会</p> |